

研究者への道赤裸々に

東北大の高校生対象講座にキャリア教育

東北6県の高校1、2年生を対象に、東北大学(仙台市青葉区)で今年度から始まった「科学者の卵養成講座」にこのたび、新たに「キャリア教育」という課程が加わった。ただ学ぶだけでなく、将来を強く意識して今を過ごしてほしい、との思いがあるようだ。(箕田拓太)

育

「将来見すえて学べ」

自らの進路決定までの道のりを赤裸々に語る渡辺教授(左) 〓仙台市青葉区の東北大片平キャンパス



12日午後、東北大の片平キャンパスに集まった約1000人の生徒が、同大大学院生命科学研究所の渡辺正夫教授(44)植物生殖遺伝学Ⅱの講義「博士になるには?」の講義「研究者になるには?」に耳を傾けた。科学者の卵養成講座は本来、「日常の不思議を発見する眼力」を養成しようという専門講義。生徒たちは応募者418人の中から選ばれ、月1回の講義を聴いてレポートを提出したり実験をしたりして、大学の教員に添削・指導をしてもらう。

が、この日の講義は勝手が違った。科学の専門用語はほとんど登場せず、渡辺教授はスライドを使って自身の中高時代の関心事や、当時抱いた将来への思いを振り返っていく。

田畑に恵まれた愛媛県今治市で生まれ、遺伝学に興味を持ち、コメの品質改良を志して東北大農学部に進学、そして博士に……。この流れだけ聞けば道のりは極めて「まっすぐ」だ。だが渡辺教授は結論を出すに至るまでにぶつかった「壁」や、その都度抱いた思いを丁寧に語り続けた。

例えば大学受験の時、センター試験(当時は共通1次試験)の模試が「1つ」しても800点を超えなくて「頭を抱

えたことや、大学院に進み、苦手だった英語に向き合って論文を6年間書き続け、世界的に権威がある科学雑誌「ネイチャー」に論文を載せるまでに至ったことなど。

そして「得意なことでも頑張るが、不得意なことも頑張る。失敗はつきもので、大事なものは何でかな、と考えること、夢を持って毎日続けること」と締めくくった。

講義を聴き終えた仙台三高理科1年の及川夏綺さん(16)は「分岐点を意識することが大事」と感じた。研究職に興味はあったが「目先の成績ばかりを考えてしまうのが

現実」で、強い意識までは持っていなかったという。

講義後、渡辺教授のもとに寄せられた感想は同様の反応が8割くらい。思いをくみ取ってもらえたと感じた一方、「『なりたいたいものは大学、会社に入ってからも決められる』と解釈した人もいて、あくまでポジティブに動くことを前提としたのですが……」と渡辺教授は残念がる。

2年前、市内の小学校でも同様の授業をした渡辺教授。強く進路を意識することを勧めるのは「大学院の修士課程まで終えて、何をやりたいかわからない子がいる」という

現実を憂うためだ。

さらに、目標を意識して毎日善事に努力を重ねること、将来研究者を目指す生徒には播るがない「覚悟」を培い、芯を築いてほしいという思いがあるという。「イチロ―選手の9年連続200本安打も、好きな野球をやるうえで『続けること』の大切さを物語っていた。同じだと思っ

©朝日新聞社 2009年

44328号(日刊)

2009年(平成21年)
9月18日
金曜日



※朝日新聞社に無断で転載することを禁じます。

